

令和5年度 第2回芦屋市立美術博物館協議会 会議録

日 時	令和6年3月14日(火) 10:00~12:00
場 所	芦屋市立美術博物館 講義室
出席者	<p>会 長 藪田 貫 副会長 岡 泰正 委 員 飯尾 由貴子 委 員 梶本 和男 委 員 若林 七奈美 委 員 藤田 恭子 委 員 興津 厚志</p>
欠 席 者	<p>委 員 安部 太一郎</p> <p>(芦屋市立美術博物館指定管理者) 館 長 石井 茂(株式会社小学館集英社プロダクション) 学芸員 山本 剛史(株式会社小学館集英社プロダクション) グローバルコミュニティ株式会社 鈴木 裕也</p> <p>(事務局) 社会教育室長 田嶋 修 生涯学習課係長 竹村 忠洋 生涯学習課会計年度職員 平沼 真由美 生涯学習課会計年度職員 小林 宣子</p>
事 務 局	生涯学習課
会議の公開	■ 公開
傍聴者数	0 人

1 会議次第

(1) 開会

1) 社会教育室室長あいさつ

(2) 議題

1) 令和5年度事業報告について

2) 令和6年度事業計画(概要)について

3) その他

(3) 閉会

2 提出資料

- ・2023年度 事業報告書
- ・展覧会動員実績表
- ・入館者数内訳表
- ・令和5年度助成金取得状況
- ・2024年度 事業計画書
- ・2024年度 展覧会予定表
- ・展覧会チラシ
- ・年間スケジュールパンフレット（令和5年度、令和6年度）

3 議題 令和5年度事業報告について

（藪田会長）

次第に沿って議題を進めさせていただきたいと思います。議題（1）「令和5年度の事業報告」について、事務局より説明をお願いします。

（石井館長）

展覧会のチラシをご覧ください。4月15日から7月2日までが「芦屋の美術、もう一つの起点－伊藤継郎」展、この展覧会については、リニューアルオープン記念ということで開催させていただきました。その後、7月22日から10月9日までは「最後の浮世絵師 月岡芳年」展を開催しております。そして「時代の解凍」展が続きまして、これは10月28日から2月4日までで、現在開催中の展覧会は「第67回 芦屋市」展で、3月5日から3月24日まで開催ということになっております。事業報告書において、展覧会の入館者数とその他の人数も含めると、2月末現在、15,309名、総入館者数合計が26,289名ということで、3月の数字は入っておりません。

「芦屋の美術、もう一つの起点－伊藤継郎」展、伊藤継郎氏を中心に展覧会を開催しましたが、伊藤継郎氏は芦屋に長く住まれて貢献されたということで、市内でも絵画教室なども開かれていて色々な方々がお集まりになり、1948年には芦屋市美術協会の創立についてご協力されて、芦屋の美術に大変貢献されたということで、リニューアルオープンにふさわしいと考えました。そして、「最後の浮世絵師 月岡芳年」展は、これまでも何回か、浮世絵をさせていただいておりましたけれども、浮世絵の後期の方、つまり江戸時代から明治時代にかけて色々作品を残された方です。そして「art resonance vol.01 時代の解凍」は、コレクション展というのは色々な館でされているかと思うんですけれども、色々違う見方でコレクションを覗いていただこう、ということで関西を拠点に活躍されている藤本由紀夫さんや高橋耕平さん、野原万里絵さん、黒田大スケさんの4名の作家にコレクションを全部見ていただいて、その中から作品を選んでいただいて、それを研究されたものを発表していく、新しいコレクションの展覧会のあり方、挑戦ということでさせていただきました。かなり新聞等に載せていただいたりしました。図録も作成し、刊行しました。2月10日から2月18日の8日間は、毎年開催しております「芦屋造形教育」展で、芦屋市内の未就学児、小学校、中学校の児童・生徒の作品の展覧会をさせていただいております。ホール1階が未就学児の作品、2階が小学校・中学校の児童・生徒ということで、芦屋市内の小学校の児童がまとまって、歴史資料展示室も合わせて見学いただきました。そして、「芦屋市展」については、今進行中ではありますが、応募作品数は前回より若干増えておりまして、審査が終了して、3月5日から無料で開催させていただいております。そして歴史資料展示室はリニューアルで展示スペースが大

きく変わり、常設展示となりましたが、芦屋の歴史を辿っていけるんですが、一部は企画展ということで、年度内に何回か展示替えをしています。以上が展覧会の概略をご報告をさせていただきました。

展覧会の関連事業等については、山本学芸員から説明させていただきます。

(学芸員：山本)

＜資料（2023年度 事業報告書）に基づき、説明＞

(藪田会長)

ありがとうございました。それでは、委員の皆さまからご意見等をいただきたいと思います。

(岡副会長)

私は2つの美術館の館長をやっているのですが、実際に人を集めたりするのは大変だということはわかっていますけれども、関連事業で遠くから講師を呼んでの参加人数が少ないです。講師の方が、申し訳なく思ってしまうと思います。自分に人気が無くてごめんなさいって。講演会になると、講師は、人を呼ばなくて申し訳ございません、って感じになります。だから全部の講座やワークショップで何十人もというのは無理ですけども、もう少し何か手立ては無いものなのかなと思います。せっかく講師を呼んでするのであれば、50名、60名か。5名、6名は、どうですかね。何か広報の仕方を工夫できないか。SNSで発信するなど、今どきのことなので、私が自分の美術館でしたら、もう少し何か工夫を考えます。精一杯されているのだとは思いますが、催しに力が無いのではなくて、アピールというか、広報の手立てはないものかということ。感想としては、まずそれですね。でも、よくやられていると思います。色んな見方ができると思うのですが、ただ私は、「具体の解凍」展も、物凄く企画としても素晴らしいと思いますが、ただし、ずっと以前から言っていると思いますが、展示室を全部用いてしまうというのが、美術館としてそれでいいのかなと思っています。だから、特別展をやるのと合わせて、常設展も必要だと思っていて、私は芦屋の美術という流れを、展示室の1つの壁面はいつ行ってもというか、少しずつ作品を替えるけれども、当館の名品展的なものがあって、それを運営することも大事ではないかなと思います。現状は、特別展が「浮世絵」だったら「浮世絵」だけ、「現代美術」であつたら「現代美術」だけになってしまっています。しかし、芦屋の江戸から明治、大正、昭和の画家について、芦屋市立美術博物館だから、芦屋の美術をこのように通覧できる、何かそのようにしないと、ふらっと当館を訪問した時に、特別展をしているだけ、みたいになってしまいます。自分に関りがなければ、観光客は全然興味を持たないかもしれないので、芦屋市立美術博物館はこれだ、っていうのが常設、歴史資料展示室以外にも美術としてほしいと、常々、思っています。以前から何度も言っていますが。所蔵作品あるいは寄託品で、吉原治良や小出楯重らの有名な作品の常設展示が必要だと思いますけれども。人を連れてきても、特別展だけでしたら引っかかるものがない。芦屋の美術って何？という感じになってしまうと思います。

(藪田会長)

岡副会長はいつも言っておられますが、私も同じ意見です。当館の長期的な課題かもしれない。

(藤田恭子)

私には、小学生の子どもがいます。美術博物館は近いのですが、正直、敷居が高いです。美術博物館の庭で遊ばせてもらうことはあっても、入館することはほとんどありませんでした。子どもが幼稚園の時に造形教育展を観に来た時に、シーンとしてるし、作品に触っちゃいけないし、静かにしないとイケないような雰囲気でしたので、小さい子どもはなかなか連れて来れないな、と思っ

ていて、ちょっと敷居が高い、重い扉、みたいなイメージを持っていました。しかし、本日の資料を見させていただくと、「ああ、参加してみたかったな」と思うものが結構あって、講演会や講座などはちょっとまだ難しいので聴けません、ワークショップ等は参加したいなと思いましたが、なかなか日程が合わないです。また、行きたかったなと思うイベントが結構あったのですが知らなかったもので、チラシだけではなくて、SNSでの発信やチラシに毎回QRコードが載っていたら、多分、スマホで読み込んだらうな、ってすごく思いました。ショートステイで2ヶ月、留学生が来てたことがあり、折角だからということで美術博物館に観に来てたんですけど、たまたまその時の展覧会がその子にマッチしなかったのか、すぐに出てしまったので、何種類か展覧会があると、展示室の規模にもよるかと思いますが、もっといつ行っても新鮮で何かチラシが無くても、ふらっと行ってみようかなと思える展覧会があったら、私やもっと若い世代、アートに触れていない人も気軽に来やすいのではないかな、とすごく感じました。一度観だすと楽しくなってくるし、わからないことがアートってすごく難しいなって思ってしまうので、もう少し簡単なものであったり、視覚的に何も知らなくても、ああすごい、って思うような、考えないといけないような展覧会よりも、気軽に入れるものから重いものまで、色んな種類の展覧会があったら、たくさんの人がもっと来なくなるような感じがするのかなと、思いました。

(藪田会長)

ありがとうございます。興津委員、よろしくお願ひします。

(興津委員)

結構色々あるんですけども、まず事業報告ですが、単年度だけではなくて長期的な人数の推移ってというのは、少なくとも入れていただきたい、というのが1点。それからアンケートを取られているのであれば、アンケートの結果は、事業報告の中に入れていただきたいというのが2点目。3点目は、統計数値の中で総観覧者数、合計に足して、その他ってというのが人数として表示されていますが、「その他」って一体何ですか。その人数が例えば5月であれば「あしやつくるば 春」に来られた人数が入っているのは分かりますが、それが無い時でも「その他」というのが常に存在していて、「その他」が何なのか、という説明も全くないのは不親切すぎるんじゃないでしょうか。広報の取り組みについて、先程、岡副会長も言われていましたが、前回にもそのお話があった訳ですので、広報でどういう取り組みをして、その結果こういうふうであって、それに対してこういうふうの評価しましたと、というような説明があった方が、私たち委員としましても、「じゃあ、こういう広報でダメであれば、今度はこういうのはしてはどうですか」ってというような意見もまた言い易くなるかと思ひますので、広報について何をしました、結果どうでした、ということは少なくとも説明していただけたら、と思ひています。前回の方の中で学校との連携ということについて、今日、ご欠席ですが安部委員からも色々ご意見が出ていましたし、それについてはどう取り組んだのか、それからどうなったのかという結果の方についても報告がありません。事業報告というのは、あくまでも事業の最初に、これこれこういうことをやります、と、それについてどうでしたということ報告するのであって、毎回、「これをやりました。これ何人でした」「これやりました。これ何人でした」でしたら、評価のしようもないし、改善する提案もしようがないので、少なくともアンケートの結果も出てないというのは、いかがなものなんでしょうか、と思ひます。それからアンケートの方は、私の記憶違いかもしれませんが、アンケートをせっかく書いてもらったのに、メールアドレスも集めないとか、せっかく回答してくれている人は興味を持っているから回答してくれるのであって、もう少しファンになる人を集める手段ってというのは、せっかくある時にも集め

てないとか、そういうのは何でされないのかなと、よく分かりません。

もう一点、「月岡芳年」展で、一枚一枚たくさんの解説をきちんと書いたものがありました。あの解説は、当館の学芸員が書かれたのですか？

(岡副会長)

あれは図録を制作された別の人の文章ですね。

(興津委員)

それは展覧会でどこかに書いてありましたか。この解説は誰々が書いたものです、っていうものを書いてありましたか。それは書かなくてもいいのでしょうか？表示しなくてもいいんですか？

(石井館長)

監修者については、表示はしていません。

(興津委員)

そういった表示も、まるまるコピーしたものを解説にするのであれば、それは表示された方がいいのではないかと見てて思いました。これについては、博物館での常識が多分あると思いますので、私にはよく分からないのですが、それについては疑問を思いました。以上です。

(藪田会長)

はい。ありがとうございます。ご回答いただく部分は後にまとめてさせていただきます。

(若林委員)

私も子どもがいますが、美術博物館に来た記憶は造形教育展ぐらいしかありません。今回、説明を聞くと、こんなにたくさんイベントをされていることを、初めて知りました。こういうのはコミスク関係でチラシで回ってきたりはしますが、興味がないとあんまりちゃんと見ません。また、有名な講師の方って言われても知識がないので、知識がない人でももっと気軽に来れるような、そういう広報活動が出できたらいいのかなと思いました。

(藪田会長)

では、梶本委員どうぞ。

(梶本委員)

先程、岡副会長がおっしゃられましたように、人集めが一番のポイントかなと思います。私は芦屋川カレッジの卒業生で作っているいわば同窓会、学友会があるんですけども、現在会員が620名。学友会で年に4回程講演会をやっています。その講演会に会員がどれだけ来るのかは、先ほど岡副会長がおっしゃったように講演していただく講師に対してあまり参加者が少ないと、折角来ていただいているのに申し訳ない気持ちになります。できるだけPRも皆に知らせる。例えば学友会の広報誌で、委員の方を通じて知らせるとか。あるいは市民センターのロビーにチラシを置かせてもらって皆さんに知らせる。やはり一番PR活動が大事かなと思います。色んな手立てがあると思いますので、そういうチラシなり広報誌なり、そういった催し物についての市民の皆さんに知らせるものをもっと活発化していけばいいかなと思います。

(藪田会長)

はい。ありがとうございました。飯尾委員どうぞ。

(飯尾委員)

私も学芸員をしておりますので、集客や広報、お客様の声を集めるアンケートは非常に重要なことで、自分の担当した講演会や展覧会を反省する際のヒントになります。事業の構成についての感想ですが、全体として展覧会、ワークショップ、講演会、コンサート、博物館実習、トライやるウ

イクまで、少ないスタッフで全てバランスよくやっておられ、様々な美術館活動を積極的にやっておられることに敬意を表します。展覧会については伊藤継郎展という近代美術から、コレクション展と現代作家の作品を組み合わせ構成した「時代の解凍」展というような展覧会、また近世—近代の月岡芳年などもされ、バランスの良い展覧会構成になっていると思います。子どもたちのための造形教育展や、芦屋市展も期末に開催されておられて、年間5本実施するのは非常に大変かと思いますがそれぞれ成果を出されています。ここ数年、具体美術の関係のメモリアルな年が続きます。今年白髪一雄生誕100年、具体美術結成70年という記念の年でもありますし、2025年は吉原治良生誕120年でもあります。芦屋は具体美術の聖地であり、今年度の最初にされました具体美術関係の「まなびはく」も非常な盛況でした。今の時点で私が考えるのは、研究者の方、具体美術を勉強したいという方、あと海外の方も含めて、具体美術に関心をもつ層というのは一定数あると思いますので、この美術博物館のアイデンティティ、つまり個性を示していくために今後数年は具体美術に重点をおいた、展覧会、ワークショップやイベントをされるのがいいのではということです。コレクション展については、単にコレクションを並べるだけではなくて、現代作家の視点でコレクションを考えるというシリーズを、ずっと以前から、2014年頃から続けておられ、この取り組みは大変評価できるのでないかと思います。一方で子どもや地域の方々へのアクセスの良さははかるため、例えば年間パスポートなども検討されていければ良いのかなと思いました。以上です。

(藪田会長)

いくつか、ご質問についてお答えいただけますでしょうか。

(田嶋室長)

広報関係について、私の方から説明をさせていただきたいと思います。本当にこの文化芸術の切口というところで、どこまで興味を引いていけるかは本当にこれは永遠の課題だと思います。私も近くに美術館がありますが、だからと言ってそこに行っているかと言えば、今では年に1回2回と足を運ばせていただいている状況です。一応チラシは見ていますけれども、それは、今、美術博物館を所管していますので、より見るようにしています。前は広報課長をやっていたので、広報についてもかなり見るようにしています。しかし、なかなか興味があるか無いか、読む読まない、新聞も雑誌もそうだと思うんですけど、そこが永遠の課題になっていまして、どう市民のみな様の気持ちを引っ張っていくか、いつも頭を悩ませているところです。今回の美術博物館の1年間の活動の広報につきましても、本市の広報には紙の広報紙にくわえSNS、広報番組、ホームページもやっています。市民の方にアピールするのは広報紙が一番目に入ってくる情報だということで、アンケートを取っても、紙媒体の広報紙が一番情報を取得する媒体とされています。そういった中で、広報紙では毎月、紙面を割いて、この美術博物館と谷崎潤一郎記念館については、かなり魅せ方も含めて、イベントカレンダーというものも付けておりますので、市民の方には見ていただけるように、日々努力はしております。先程の、今ニーズ的にはSNSというところもありますので、SNSにつきましても実施していますが、なかなかこのSNSというのは即効性と拡散性がありますけれども、この美術博物館に限らず市の情報につきましてもSNSでぱっと発信すれば、ぱっと見られますけれども、2日後にはもう見なくなるっていうような状況っていうデータも取れていますので、媒体を上手いこと使いながら情報の発信についてもう一度、見直していきたいとは思っております。今回の資料の報告の中で前回のアンケートの状況等が無かったようですので、ご指摘いただきました点につきましては、アンケートの結果っていうのも、今後、皆さんに見ていただけたらと

思っております。あと来館の推移につきましても、数年の状況で見ていただいて、それについて評価をいただけたらなと思いますので、今後資料の作り方について、ご指摘いただいたところには加味させていただきたいと思います。広報関係等、来館の集客関係につきましても、課題になかなか難しいところがございますので、この件につきましてももう一度見直しながら進めたいと思います。

(石井館長)

今、田嶋室長からお話しがありました、アンケート調査につきましては、毎回の個別事業計画書をお出ししていますけれども、こちらの方にアンケート調査の記載を入れておりますので、次回はそちらの方をお渡しして、見ていただく方が具体的でよろしいかなというふうに思いますので、やっていきたいと思っております。あと広報については色々日々色々な形でやっておりますけれどもこちらも全体的に媒体であるとか、色々な新聞やフリーペーパーですとか、色々な形で色々な情報を載せていただくように、それもまた表がございまして、次回お渡しはできます。あと小学校、幼稚園には、毎回、展覧会毎にお願いをしてチラシをお配りしています。しかし、その都度で情報が全て入ってくるものではないので、そのタイミングでワークショップであったり、展覧会のことであったり、なかなか特に小学生は保護者の方に渡るだろうということで、これは毎回やっておりますけれども、皆さんに来ていただけるような工夫をまだ足りない部分があるか思いますのでやっていきたいと思っております。

(岡副会長)

広報専門の担当者がある美術館があります。広報は片手間にはできません。広報担当者は広報のことだけを考える。SNSに長けているスタッフがそれを新たに構築して、他館のことをリサーチして、ワークショップの参加者や、さらにワークショップを申し込んで落ちた人に対しても発信します。広報専門の担当がいないと、片手間に学芸員ができるようなものではないです。学芸員は広報担当と話しながら、どうしたら来館者が増えるかということを考えないといけないし、そのためのアンケート結果なんです。アンケート結果を展覧会ごとにまとめます。今はアンケートはQRコードで取るんですね。取り上げたものは必ず集計をして、その結果をもう一度フィードバックしなければ意味がないです。その緊張感というか、我々にとったら何を言われるのかわからないし、いろいろな場で様々な意見をいただくので、それに対しての資料をきちんと出していかないといけない。先ほどの指摘は、私もその通りだと思うので、その広報専門の担当をどうしていくかという、入館者を倍に、少なくとも1.5倍を目標にして、今度はこういうふうにやらないといけないと目標をめざすべきです。

繰り返しですけど、美術博物館だから、その流れの中に近現代美術もあって、アンフォルメルも生まれたので、その時系列の一角が欲しい。伊藤継郎の代表作品が何点か観られて、やっぱり美術館に来るとこういうものがあるねっていうふうにしなないといけない。具体美術ばかり見せられるとアンフォルメルですから何かかわからないっていうのは、それは当然として、それとは違うオーソドックスな—伊藤継郎先生は全然オーソドックスではないけども—そういうアーティストが芦屋にいたということを芦屋ゆかりのというふうに広げれば、阪神間—西宮も尼崎も含まれます。今、各館で具体美術の取り合いみたいになっていますが、芦屋市立美術博物館は具体の聖地で、ほかに色々な美術もあって、それは福田眉仙の日本画でもいい。ですから、そういうものに対応するような展示室、あるいは展示室の一角の壁を入替えて—そんな難しいことではないと思います。耐久性のあるものは長く展示できるはず。広報の情報の取り方と、広報の発信の仕方と、それからニーズに応えるっていうか、来た人が長くいられる、どれだけ長く滞在してくれるかっていうこ

とを何より優先して考える、っていうことですね。人的戦力にてらして大変でしょうが。

(藪田会長)

私がこの会議の委員になった時に、最初、議論していたのが、芦屋市立美術博物館の方向性っていうか、当館の課題をはっきりした方が良い、っていうことだったと思うので、岡副会長がおっしゃっていることはまさにこの博物館が旗頭とするべきことだと思います。何でもやる訳じゃなくて、芦屋市立美術博物館というものは、定位置っていうか、そういうものを掲げておくということが大事だと思うんです。今回のリニューアルの時に課題というか旗頭をそのままもっておられるという問題と、それからリニューアルによって少し、新しく追及された問題というところがあったと思うので、そういう意味で言うと、先程、興津委員から資料の出し方に意見が出ていましたが、私もそう思います。今年度は単なる1年ではなくて、新たに出発した1年ということだと考えると、そういう時に何を考えてやろうとしたのかっていうことと、それに合わせて課題が何であるかという議論をするべきだと思うので、それはここにおられる委員の方々はおそらくそれを非常に意識しておられるので、私もそこは参考にしていただきたいと思います。私自身もやっぱり伊藤継郎の展示も面白かったし、その前も村上三郎の展示もとても面白かったので、ここへ来るのはそれを観るという、その目的があって来るっていうのは、この委員を引き受けた時に何をしたらいいのかと思ったんですけども、そういう事もあるんですけども、ここに来て何が利益があるかという、村上三郎、伊藤継郎の作品が見れたという、私は個人的にはすごく幸せなことだと思います。そういうことというのは旗印として持ち続けなければならないと思うんですけど、問題はそのことの次に、次はどこに課題を持って行って、どこの部分にいわば、得意分野を作っていくのかということがあると思います。その時には、やはり、まず内部でそういう検討をされた結果がこういう数値ではなくて、ここはやはりコメントとして出るべきだと思うんです。これを狙ったけど、こうであったとか、これは狙ってなかったけど、こういうのが出てきたとかとか。そういうことで言うと私はこれから事業集計される時には生のデータとしてアンケートを出されるかどうかは別としても、内部としての自己評価のコメントっていうのがあると、私達はそれに合わせて議論しやすいというところもあるので、そういう癖を付けられたらどうかと私は思います。飯尾委員がおっしゃったように、よくやっておられると思うんですけど、よくやったねって子供に評価をする訳じゃないですので、この部分は非常に良くなったねとか、ここはやったけど課題だねとか、ここには全く気が付いてないんじゃないという、そういう議論が双方向である方が指定管理というのも、5年なら5年の間で1つの達成が求められるわけですけども、毎年毎年の積み重ねだと考えて、我々も毎年毎年の奮闘をコメントさせていただく立場であるので、その時にはまず内部からの自己評価みたいなものがあって、そこに我々が足し算なり掛け算なりの議論をさせていただくという形だと思うので、それがないとこのままの数値だけ議論されてしまうと、その数値の意味そのものも探らなければならない。先程「その他って何ですか」っていう話みたいになる訳なので、そういうことを考えた時に、今後、年度事業報告の報告書の中には、もう1枚自己評価みたいなものをきちんと付けていただいて、この点を検討して欲しいという形で我々に投げ掛けていただける方がいいかと思います。その時には、芦屋市立美術博物館がどこに向けて事業をしていきたいと思っておられるのかっていうことがあれば、我々はそれに協力できると思います。岡副会長の意見は、それをずっと考えて議論していただいていると私は思っています。その点、ぜひ、次に向けて善処していただけたらと思います。

それから若いお母様委員の方々には、ぜひ、委員の間にこれなら観に行こうとか、これを一度観に行こうとかで、来館される形にさせていただけたらと思いますので、よろしく願いいたします。

では、次の議題、来年度の事業計画について、進みましょう。

(石井館長)

先ほど、ご質問があった集計表の「その他」の欄は、工芸室、体験学習室の利用者人数、それから庭の特にイベントなんですけども、庭にいらした方の、アトリエにいらした方は入ってないですけど、そういったイベントを分けた人数等が入っています。ですから、かなり「その他」の数字が大きいのは、つくるば、がかなりの参加者数なので、1,000人、2,000人の単位で数字が載っています。

それでは事業計画書に基づいて説明をさせていただきたいと思います。

<資料(2024年度 事業計画書)に基づき説明>

(藪田会長)

さて、何かございますか。事業計画につきまして。

(興津委員)

2ページ目ですけども、最後の2行のところで、常設展示室について大きくリニューアルし、って書いてありますが、これって来年度リニューアルする訳ではないですよ。何かこういうふうにかかれると、また、リニューアルするの?と読めてしまうんですけど、これは多分、昨年度のものをそのまま使って書き間違えだと思うんですけど、直された方がいいのではないかと思います。

(石井館長)

はい、申し訳ございません。

(興津委員)

それが資料の件で1点と、もう1つは先ほどから広報のお話が何度も出ていましたけれども、来年度の事業計画の中で、どういう広報について、どういう形で力を入れるのかっていうことが、今、既にお考えがあるようであれば、この場で述べていただくと、わかりやすいと思います。特に芦屋市全体の広報との連携については、例えば先程の広報紙ですとか、そういったことも発言がありましたので、それらについてされるのだと思いますが、特に信濃橋洋画研究所については、大阪など芦屋市外にもPRし、集客につなげることができるものについて、どのように取り組まれる予定なのか、お考えが既にあるようであれば述べていただくと、また、結果どうだったっていうお話につながっていくと思いますので、もしそういうのが既にあるようであれば、広報についてのお考えを教えていただければ幸いです。

(藪田会長)

いかがですか。

(田嶋室長)

広報紙につきましては、紙の媒体については引き続きやっていきたいと思っています。SNSにつきましては、先ほども岡副会長の方からありました特別に広報担当の人材をとということになりますと、それはなかなか難しいところはあるかと思うんですけども、指定管理者と、もう少し勉強ができるような形の体制が取れるのかどうかという事は考えてみたいと考えております。

(藪田会長)

はい、ありがとうございました。

(岡副会長)

もう一度戻りますけれども、来年度の展覧会の予定ですが、大学院で学んだ若い学芸の方が企画すると、私なんかいつも言っていますが、ターゲットというか自分のメッセージを、全部がわかっ

た人に向かって投げかける傾向があるんですね。具体美術を知っているのが当たり前という、芦屋だから具体美術は当たり前でしょ、という自分の立ち位置の常識から学芸員は発信しがちです。自分がわかっているから皆さんもわかっていますよね、っていうところからスタートするので、例えば、今井祝雄展では、今井祝雄って元具体美術協会員だから芦屋なんですよっていうけれども、今井氏は大阪の人だと思うんです。今井祝雄は皆わかっていますよね、ということで言われたら、この場にいる委員は全員知ってますか？信濃橋洋画研究所ってというのは小出檜重が作ったのは、もう学芸員にとったら当たり前ですが、もし私が若い学芸員だったら、なぜこれを芦屋市でやるのかっていうことを知らせるところから考えます。胡坐をかいていたら駄目です。どうしたら我々はここに生き残っていけるかという話になる。その時に、格好良いのはいいけれども、そこは少し敷居を低くして、なぜ今井祝雄が芦屋なのか、信濃橋洋画研究所をなぜ芦屋美術博物館で顕彰するのかというふうに、自分達で少し敷居を下げないと、これは当たり前だ、チラシを見るかたが知らないのが駄目なんだ、というような感じでは駄目です。危機意識をもってやらないと、信濃橋洋画研究所って、しなのぼし、って普通の人がまず読めるかどうかという次元の世界になってきます。もっと上手くアピールして、なぜこれを芦屋で100周年でやるのかっていうことを平明に説明するようにお願いします。本当にターゲット層をきちんと決めて、年配の人達にも来てもらって、せつかく料金で優遇措置されている訳だし、その人たちに向かってもう少しわかりやすくする必要があります。単純に「今井祝雄」にふりがながないので、派生的に以上を思いました。

(田嶋室長)

ありがとうございます。なかなか切り口ってというのは、分かりにくいところも私も具体美術の全ての作家を存知上げている訳ではございませんし、そういった芦屋との由縁で必要だということには凄く感じましたので、そういったところに力を入れていきたいと考えております。

(岡副会長)

繰り返しますが芦屋の歴史と文化財、芦屋のあゆみ常設展は、歴史でしょう。これを美術館的な立場でどこか一角に常設展示が要ると、私はずっと思っています。全部、特別展で展示替えしてしまうのに対してはどうか、といつも思っています。

(藪田会長)

文化財展は久しぶりですか？

(竹村係長)

そうですね。自前でするのは久しぶりですか。スポーツ展などはやっていますけど。

(山本学芸員)

特別展として文化財展をするのは、近年はしてなかったですね。今までは歴史資料展示室が年に3回、展示入れ替えをする際の副題として「芦屋の歴史と文化財」という展示名でやっていたので、ここまで大規模にするということは何年ぶりかどうにか過去に開催した土器土器展、芦屋の出土品で紹介するという展覧会ぶりぐらいなので5年以上前ぶりですね。

(藪田会長)

今回おっしゃっているのは、そういう狙い目ですね。この時期に何をするのはどういうことが目的なのかということをはっきりさせないと、ルーティンみたいにして次々していれば人が集まってくる訳ではないということなので、一度セットアップして、もう一度考え直したらどうかというご意見だと私も思います。その辺は、まだ広報を含めてこれからの課題だと思いますので、引き続きご検討いただけたらと思います。

これで議論を終えたいと思います。ありがとうございました。

<閉会>